

# たひら

## ふるさとの禮讚

主筆 山田 綠 雨

物質的壯麗に眩惑され、科して、いひ知れぬ郷土愛護學文明に陶酔し所謂都會の精神を振起してやまぬ。文化生活に耽溺して、神經マヒし靈肉共に酸敗靡爛したる人々も、遙かに頭を回の大精神である。らして、その生れ「ふるさ」郷土に捧ぐの走心は「と」を思ふ時、郷土は一種即ち國家に殉ずの大精神での靈感となつて、背郷者のある。故國なく、郷土を持つ心打つてやまぬだらう。たざる冷血なるユダヤ人の千里の長風に駕し、萬里如き、都會文化人に願求しの波濤を蹴つて海外の殖民でやまぬ一事は、ふるさと地に建闘する大和男兒も、愛護の精神である。郷土を一度思ふ故山の天地に走す持たざる先驅者、ふるさとに背きたる成功者の心、如何に感慨や如何!

「ふるさと」は一種の靈感日の哀感をそつてやまぬなり、慰藉なり、天地廣大事だらう。無邊なりと雖も、五尺の小軀隱るゝ所なき追はるゝ罪もよろし、位人臣を極め黄人も、その生れ故郷を懐ふ金山と積み、吾れ一人金殿ては斷腸の血涙はふり落し玉樓に住み、豚の如く肥満てやまぬは獨り映畫、小説し猛獸の如く威張つて暮せ上の戲事ではない。況んやば、人生の能事足れりとする聖美、純真なる感情に生きる、所謂成功哲學の中毒者る詩人にあつては、郷土の對しては、余何をか云は自然は、そのまゝ詩でありんやだ。又歌である。

「ふるさと」の自然「一木一石一草一水追憶の種ならがあつたと一撃を與ふる而ざるはなく、郷土の土の香已。は、ハイカラ文化都會人を

## 熱中冷言

一机を前にして、ポツチンとして閑室に獨居する。胸中、何等の苦悶あるなく焦慮あるなく、虚にして無なる心境だ、突如心頭を掠むる一思想あり、斯くして余も遂に冷土墓門に歸すのか? 古くして新らしい人生第一義の問題何故か故に生れ、生きて何をなすべき、死後の世界は果して如何? などの事どもわが心を悩ませてやまぬ。

奥の細道ふみわけて、煩鎖なる人世を解脱した俳聖芭蕉の心事を思ふで感無量「衣裳哲學」の著書哲人カライルはいふ「人間はポロを作る動物なり」

夏は吾れらプロ連にあつて惠まれたるシーズンである一張羅をポロにせず、家にあつては、裸同様に暮し得れば、さるるにも孔雀の羽を擴げて大道をシヤナリスナリと歩かねばやまぬモダンカール(現代女性)パティール(虚榮妖女)の華裝虚飾の、暑苦しくも見え、すさまじくも恐ろしく見え、プロ君、貧書生の敏遠する無理からぬ事。嗽石博士は「猫」をしていはしむ

「せめて夏だけは、毛をぬいて、骨と皮だけで暮したい」と。

女の眞似して役者の如くオシヤレして鼻持ちならぬ薄化粧の中性優男、以つて如何。

發行 毎月十七日  
編輯 山田政好  
印刷 福島縣平町仲町  
所行 福島縣平町  
定額 一年十部拾錢  
指定拾錢増

平銀行頭取 山崎與三郎	元代議士 安島重三郎	小田炭礦株式會社 社長 小田吉次	東部電力株式會社平營業所 所長 武田精一	好間軌道株式會社 山崎佐市郎	内郷村々會議員 加藤丈夫 四家又一	江名町 吉田正雄 遠藤俊一郎	青木貴一郎 好間村大館
----------------	---------------	---------------------	-------------------------	-------------------	-------------------------	----------------------	----------------

萬年瓦工業株式會社 社長 江口忠一	泉村 佐藤醫院	縣立回春園 園長 川井重之	泉村 佐々木三郎	二本松電氣株式會社 平出張所 平町白銀町	和田禎宗	石城郡四倉町 磐城セメント株式會社 本社 九ノ内ビルディング六階六五二號室	釜屋商店	入山探炭株式會社 磐城炭礦株式會社 小田炭礦株式會社 古川鑛業株式會社	登良酒 鶴仙 釀石城郡平窪村 松吉屋本店 電話二一四番	山崎合名會社
----------------------	------------	------------------	-------------	----------------------------	------	---	------	--	---	--------

